
絶対守護者～あなたを守ってみせましょう～

佐井村伊佐太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対守護者〜あなたを守ってみせましょう〜

【Nコード】

N6932R

【作者名】

佐井村伊佐太郎

【あらすじ】

平凡な女子中学生である私、その前に現れた『守護者』・・・
一体彼は何者なのか？
そんな中クラスメイトが殺人事件の被害者に。犯人ではない・・・
しかし彼は怪しい動きを見せ始め？・・・
一体彼は何者なのか？・・・

（前書き）

中身は同じなのですが、間違えて短編で投稿していたので、ほかにもう一度再投稿しました。

そちらの方をよろしく願いますm（
）m

『あなたを守ってみせましょう』

そんな台詞とともに、私の前に現れたのは一人の青年だった。

「まも・・・る？」

ええ、青年は大袈裟な動作で頷く。

「何人からでも、あなたを守って差し上げましょう」
意味が、分らない。

「マモル？」

ええ。

青年は頷く。

「でも、誰から守るの？」

「あなたに害を成す全てから」

そう言った青年の顔は、真っ直ぐだった・・・。

そう、見えたのだ・・・。

中学生というのは平凡だと思う。

高校生のように派手に遊んだり出来ないし、だからと言って小学生のような自由さもない。

平凡とは退屈だ。

私は——くにもりみゆき国森美雪は——そう思う。

そんな平凡で退屈な女子中学生の私は、ある日一人の守護者にあつた。

それが——

「美雪様、美雪様っ」

私を後ろから追いかけてくる彼だ。

名前は恭唯都きよゆいとというらしい。

「美雪様つてば、お待ちください」

肩で息をしながら、彼は私に追いついた。

どうでもいいことだが、彼はいちいち動作が大袈裟すぎる気がする……

「もう、先に下校されるとは……。聞いていませんでしたよ?」

それは言ってなかったからそうだろう……

「親切なご友人が教えて下さらなかったら、美雪様を一人で下校させることになってしまっていましたよ」

一体誰から聞いたのだろうか? 正直この人には、あまり私の友達と接触してもらいたくはないのだけど……

「今日はそういう気分だったのよ」

そうでしたか。そう言いながらも、彼は自然に私と歩調を合わせる。

「……………」

「どうかされました?」

「……………」

こつこつ無神経な所が——いや、分かっているのに聞いてくる所が、嫌いだ。大嫌いだ。

「ご気分を害したのなら——」

聞き終える前に足を速めてその場から去る。

彼はつい先日。本当につい先日、私の前に現れた。

あまりにふざけた事を言うものだから、本気にしていなかったのだけど……。彼は本気だった。

殆ど四六時中私にくっついていてる。

家にも、学校にも……

流石に学校は敷地内は入れないようだったが、外でずっと待たれているのは気味が悪い。

と、考えている間にも、後ろからの足音は近づいてくる。

どうやら私には、心休まる場所も時間もないようだ。

家に着く。帰宅した。

帰宅部の私は本来ならもっと早く帰れるのだが、真っ直ぐ家に帰ったためがないので、いつも家につく頃には日が落ちている。

今は冬だ。日が落ちるのは、まあ早いのだが。

「ただいま」

がらんと無駄に広い部屋に、私の声が吸い込まれる。

明かりのない部屋には、温もりというものがない。

明かりを点け、カーテンを閉めてまわる。

意味もなくテレビをつけた。音のない空間は嫌いだ。

「美雪様」

しかし、彼の声ばかり聞くのが嫌だというのもあるかも知れない。

「何？」

ついついぶっきらぼうな口調になる。

「上着を預かりましょう」

しかし彼は意に介さない。

守護者を自称する彼は、執事のような事ばかりしている。（正直

執事自体どういうものかよくは分かっていないが）

そもそも私に、守ってもらうような必要はない。

平凡な中学生の私には、平凡な生活が約束されている。

敵なんてものは、ない。

夕食。二人で夕食。

二人と言うのは私と彼だ。親はいない。

そもそも私の家は母子家庭だ。いるとしても母だけだし、その母も今はまだ仕事をしているはずだ。

だから夕食は一人の時間。四人用のテーブルでいつも一人で食べていた。

だが今は二人だ。私と、彼。

正直二人して食卓を囲むのは、御免こうむりたかったのだが、私も流石に夕食を作ってくれる彼を一人除け者には出来なかった。

夕食を自分で作るという選択肢は、既に諦めている。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

夕食のとき、彼は静かだ。

二人して無言の食卓とは、気まずい。

普段は常に、何かと話している彼は、夕食のときだけは静かなのだ。（行儀はいいのだろうか・・・）

私の方から話を振るのも癪だし、あまり話したい相手でもない。

毎度毎度夕食のとき、こんなことを考えているものだから、最近の夕食は気が滅入る。

そして、私がこんなに一人で考えているのに、どこ吹く風で淡々と食べる彼に、妙に苛立つ。

食事というのは、料理の味が良ければ言いというものじゃない。

「・・・・ごちそうさま」

給食は食べるのが遅いが、夕食はとても早い・・・
「お粗末さまでした」

12時ももうすぐ回る。流石に眠りにつく時間だ。

彼は私の家に寝泊りしている。（四六時中、だからだろう）

しかし決して、親公認と言うわけではない。

そもそも私の母親は――

・・・・ガチャリ――

玄関のドアが開く。足音。

・・・カチャリ――

リビングへと続く扉が開く。

2階にある自室に行こうとしていた直前。私はまだリビングにいた。

「・・・・・・・・」

母は――私に一瞬視線を向けると、何もなかったかのように・・・・。私など、その場にいないかのように・・・・。立ち去った。まあ、これは、いつもの、事だ。

私はよく知らないが。他の家庭で朝、「おはよう」と挨拶するようないや、違えど、彼女が私を無視している。

いや、違うか・・・

私はいないのだから、無視も何もない。

そういう、ことだ。

「・・・・・・・・」

彼の視線が背中に突き刺さる。

彼もこの光景を見るのは初めてではないはずだった。

それでも・・・・。それでも彼は、毎回のように、私を視線で突き刺してくる。

それが・・・・。優しくはなく、痛い。ひどく痛い。

彼の視線から伝わるものは、私に対する優しさや、そういう類のものではない。

私を通して、母を突き刺している。その視線で。

普段はどちらかと言うと、柔らかな雰囲気な彼。

しかし今は、違う。今だけは、違う。

今の彼へ向ける、もっとも適切な感情は――恐怖、恐れ、慄き、怯え、畏怖・・・

普段の彼は嫌いだが、今の彼は、とても、とても怖い。

今日も一日が終わる。私の一日が終わる。私の、平凡な一日が終わる。

おやすみなさい。明日もいいことがありますように・・・

いじめられた。イジメラレタ。学校で。

これは仕方ないと思っっている。むしろ、今まであんな奇怪な男がくっついてる私に、誰も何のリアクションもとらなかったのがおかしいのだ。おかしかったのだ。

そもそも彼女達がしていることは、いじめには至らないのかも知れない。

じゃあ何？

嫌がらせ？ああ、嫉妬か。

彼女達は、彼が気になるようだ。

「あの人は誰なの？」

誰、なんだろう・・・。誰？

「さあ」

私の態度が気に入らなかったの？

「何よ・・・ちょっとモデルからって、いい気になってんの？」

私は周りから見ると、容姿が綺麗な方らしい。そして彼も、端正な顔をしている、らしい。ようだ。そのようだ。カレハカッコイイ。

「さあ」

さあ。これが良くなかったの？

さあ？

後は殴る蹴る、暴力に訴えかけられた。訴えかけられた暴力も迷惑なんじゃ、という程の有様だった。

まあそれでも、一応女の子が大切にしているという、顔は傷つけられなかった。

あざくらいはできただろうが、まあその程度だ。

そしてその程度の「いじめ」は平凡なものだ。

平凡な私とお似合いだ。

3日後。朝。ホームルーム。学校。

私をいじめてた生徒が死んだそうだ。殺されたそうだ。

昨日の夜。ちよつと背伸びしている彼女らは（不良という程でもない）いつものようにいつものごとく、夜の街で遊んでいたそうだ。彼女達の夜遊びは結構有名で、何度か補導されていたとも聞いている。

死に様は綺麗な方だそうだ。担任曰く「安らかに」・・・

殺されたのに「安らかに」??

まあ個人的には死んだ後どんな姿であろうと、死んでいるのだから関係ないと思うのだが・・・

詳しいことを担任の教師は話さなかった。

話したことは、

死んだのが私をいじめていた彼女達（3人）であること。

夜遊びをしている時に殺されたこと。

こんなところだ。

しかし噂や情報といったものはすぐに広まる。人の口に戸はたてられないのだ。

私は正直、友人と言ったものが少ない。（見栄を張った。正確には皆無だ）

だがここは学校。言葉を交わすくらいの間柄の人間が一人もいないことは、まずない。

聞いて回ればもっと集めることが出来たかもしれないが、とりあえず私が集めた情報はこういったものだ。

事件現場は学生が遊びまわる繁華街の中心から、少し離れた所に位置する公園であること。

事件が起きた時間帯は、夜の10時から12時の間ではないか？ということ。

この時点で、私は既に、1つの憶測を頭から消していた。
憶測・・・
それは・・・

彼が、恭唯都が犯人ではないかという憶測だ。

（後書き）

なんとかここまで書きました・・・

最後まで読んで下さった方、ありがとうございます！

次回読んで下さる気がある方は、連載版の方をよろしく願います
すm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6932r/>

絶対守護者～あなたを守ってみせましょう～

2011年3月17日19時55分発行